



俺の幼馴染の娘が金髪碧眼学園ハーレムで以下略

八重代かりす

「マスター、ご命令を」

少女の美しい声に俺は視線を向けた。

いや、美しいのは声だけではない。

顔も髪も目も肌も、挙動も体軀も、すべてが美しい。

俺は改めて彼女たちを観察し直す。

整いに整った無機的な顔かんばせに少女らしい可憐さ。明るい金髪ゴールドと空色の碧眼スカイブルーの彩り。肌は

雀斑そばかす一つない完璧な皓さしろさ。精緻過ぎる造形の中、呼吸が確かめさせる肉体のたおやかさと、

律動が確かめさせる知性の香り……。

そんな容姿だけで食べていけそうな少女が、しかも、綺麗な直立をしている。背を伸ばして胸を張り、視線は正面水平を揺るがせない。両足は踵をつけてビシッと揃え、両腕も指先までピンと真っ直ぐだ。

基本教練における『不動の姿勢』だった。手首の位置も操典通り。鍊度の高さが窺える。つまり、一点の汚れもない肌だけでなく、隙の無さまで具えているのだ。

それだけではない。美貌の主らは皮膚に張り付くような弾性樹脂で首から下を覆っている。

つまり水着姿のように乳房や臀部の隆起もはつきりとわかる……という程度ではない。この伸縮性に富んだ繊維は厚さ0・5ミリ。おまけに各々の体格に合わせ、2%縮小成形

されているという。

よって、形の良い乳房の上には小さな突起も見える。薄い脂肪の下の筋肉も、かすかに浮かび上がる肋骨も見える。素晴らしい曲線を描く、柳腰のくびれも見える。何とか目を逸らしているが、下腹にある女性の証ですらも、気を抜くと見えてしまうだろう。

——この素材の素晴らしさは俺にもわかる。文字通り、継ぎ目がない。生命体のような一体形成。分子段階で設計されている証だ。人類が進歩させてきた衣服のさらなる延長、これはその極限といってもいい。しかしなんといい……。

目の毒だ。

厳格なはずの『不動の姿勢』もこれでは肉感的な艶姿あですがたになる。

「……とりあえず、今日はまともな学生服を用意してもらおうか……」

「了解。衣料品店を当たってみます」

「……とはいえ、全員同じ寸法というわけにはいかないよな……？」

「着回すのは不可能ではありません。しかし、困難でしょう」

「……そうか。では念のため、もう一度、貴様らの年齢と構成を復唱しろ」

「はい。我々は、第一世代十六歳が私を含め六体、第二世代十五歳が六体、第三世代十四歳が六体、第四世代十三歳が六体、第五世代十二歳が六体、第六世代十一歳が六体、合計三十六体です」

同じ美少女でも、育ち盛りの五歳差は大きい。体格も違う。瘦身は変わらずとも、背丈や……胸の膨らみは歳と共に増す。それは目を逸らそうとしても、暴力的に視界に入ってくる。嫌でもわかる。全く同じ制服という訳にはいかない。寸法は一世代ごとに変えねばならない。

……つまり何が言いたいかというと……。

この直立不動の**三十六人は全員揃って金髪碧眼の美少女**なのである。

彼女達は規則正しく整列している。いや、まさに正スクエア方行列だ。

しかも同じ顔、似た体付き、おそらく遺伝子も……。皆、裸同然であるにも関わらず、羞恥の色は無く、無表情を保っている点も共通する。

一人の例外も無く完璧な美貌を誇り、一人の例外も無く完璧な姿勢を崩さない。それは高価で高級な工業製品の陳列に思えた。

一時間目

事のきっかけは一通の電子メールだった。

送信者名は『メガネブス』……我ながら酷い設定にしたものである。

彼女の本名は……たしか、『七草＝マリオン・撫子 (Nanakusa-Marion Nadeshiko)』
俺と同じ年だから三十二歳だ。

……それが何故、『メガネブス』かというところ……二十年前の俺は小学生だったからだ。

あとは察して欲しい。

過去の軽率さを悔みつつ、開封すると中身は仕事の依頼だった。

——あたしの娘たちの教育係になって欲しい。

一読し、要約すると、このような内容になった。

正直、悪戯かと疑った。ただ、添付されていた電子証明は高品位である。

俺は何か『メガネブス』の本名綴りを思い出し、検索して驚く。彼女の名はたしかにシカゴ大学の卒業名簿にあり、そこで博士号まで取っていたのだ。

そして、添付されていた電子証明とも符合する。

「そういうえば、成績は良かったな……」

俺は二流大学が精一杯だった。この二十年に開いた差に愕然とするしかない。

だが、これで悪戯の線は薄くなった。そうすると、メールの中にあつた一日二百ドルの基本給が輝いて見える。

「騙されてみるのも悪くないか……」

そう考え、俺は指定された住所を確認する。市町村箇所を見て、何となくメガネブスの事情が分かった。

そこは飛天市——現在日本で唯一のLIC／Low-Intensity Conflict低烈度紛争地域——だった。

指定された白亜の研究施設前に俺が立つと、意外にも彼女は一人で現れた。

「久しぶりね、ヤヒヤ……いえ、今はたしか……ヤヒヤ……イブン……ザカリヤ……だったかしら？」

……その通り、今の俺はヤヒヤ……イブン……ザカリヤ……だった。

「ああ、よろしく。ドクター……マリオン」

白衣のマリオンには確かに『メガネブス』の面影があつた。

ぼさぼさに伸びた黒髪に、不健康そうな青白い肌に、度の高い黒縁眼鏡——この辺りは変わっていない。だが……。

「変わったな……」

俺は『綺麗になった』というのが恥ずかしくて、つい言葉を濁した。

顔立ちが大人びただけではない。昔と同じ小柄な瘦躯でも、背筋が伸びた。子供の頃の様子にオドオドもしていない。今思えば可愛らしかったそばかすも消えた。漆黒の双眸には力強い意志と知性が輝き、そのまなざしは怜悯そのものである。

そして、真っ直ぐ前を向いている。

もう誰もこのマリオンを『メガネブス』とは呼ばないだろう。

だが、彼女は俺の意図と逆の感想を抱いたらしい。

「老けたのはあなたも同じ」マリオンは口調も明晰になっていた（お互いもう三十二だ。気持ちが変わらないでもない）。「これが契約書。書き終わったら、娘たちのところへ行くけど、会う前に髭^{ひげ}だけは必ず剃っておいてね。不衛生よ」

俺は「…：了解」と契約書を受け取る。

勿論、頑張って伸ばした髭を剃る事に抵抗はあった。第一、髭の手入れを欠かした事もない。これが不衛生なら、女性の長髪も不衛生になる。…：だが、依頼主には逆らえない。また、親心なら、重んじるべきだ。

——とはいえ、『メガネブス』なら、もう少し、柔らかい言い方をしただろうな…：。

俺は昔を懐かしんだ。

そのせいで、俺は初歩的な失態を犯していた。

契約書を熟読しなかったのだ。

さすがに本契約そのものには署名しなかった。しかし、詳細説明前の守秘義務遵守には同意署名をしてしまったのだ。

「書き終わった？　じゃあ、娘たちのところへ行きましょう」

マリオンは契約書をかっさらうと、勝手に歩き出した。

俺は慌ててその後を追う。ついでに言えば、一方的な態度を勘ぐってもいた。

——先程から【娘たち】と複数形で繰り返しているが、姉妹なのか？

いやそもそも

——父親はどうしたのか？

…：いずれにせよ、聞きにくい話である。どう切り出すべきか、迷っていると…：
「ここよ」

とマリオンは目的地到着を告げる。移動が徒歩だったから、近場だとは思っていたが、想像以上に早かった。

案内された先は、研究施設に隣接する学校だった。

もつと言え、先進国都市部によくある校舎だ。日本の中学や高校に似ている。

それを見て、少し嫌な予感がする。

俺はマリオンの【娘たち】を二人、多くて三人と考えていた。彼女のような高学歴者は良くも悪くも子供の数を絞るからだ。

「…：なあ、あの契約書には【娘たち】の数が明記されていなかったよな…：」

「だから？」

マリオンは足を止めずに問い返した。俺は後を追いながら、質問を補足する。

「いや、例えば、お前が身寄りのない孤児を大量に引き取って育てているとか……」

だとしたら、尊敬に値する。しかし、そんな大勢の面倒を見るのは一苦勞である。だが、「そんなわけないでしょ」マリオンはあっさり否定する。そして、「勘違いされると困るから断っておくわ。あたしは子供が嫌い」

「は？」

「正確にはギャーギャー五月蠅い子供が嫌い。騒いでばかりで無能な子供が嫌い」

「いや、幼い子供は五月蠅いものだ。それに未熟な子供が無能なものも仕方ないだろう」

「うん。でも、それを矯正していくのが教育というものでしょう？」

俺は言葉に詰まった。マリオンの言う事は一理ある。俺自身、年少者には厳格な姿勢で臨む。しかし、母親とはそれをここまで明言する生き物だろうか？

悩んでいると、マリオンは言葉を重ねる。

「逆に言えば、無口で冷静で沈着で聡明で有能な子供なら、嫌いではない。あたしに服従するならば、なおよし。そう思っただけで頑張ってきた」

「……しかし、子供はお前の人形ではないだろう？」

俺は子育てをした事がない。が、今後【娘たち】の子守りをする以上、方針は擦り合わせておくべきだ。

「勿論、子供は人形ではないもの。理想通りにはいかなかったわよ。でも、成果は出た。努力の甲斐はあったの」

「……」

「なのに、そこへどこの馬の骨ともしれぬ輩を混ぜる？ まっぴらごめん。やりたい奴が好きにやればいい。けど、あたしはあたしの娘たちで精一杯よ」

マリオンは辛辣で酷薄だった。

俺に口は挟めない。マリオンが己の娘を第一とするのも母親として当然だ。

何より、子守りをやらされる身としては、楽な方がいい。この様子だと、基本的な躰はなされているのだろう。だが、そうすると

「では、何故、俺を呼んだ？ うまくいっているのなら、俺は必要ないだろう？」

俺は署名する前に聞くべきだった事を改めて訊ねた。

「薄々わかっているんでしょ。《荒夏事変》よ」

荒夏事変——それはこの飛天市を先進計画城壁都市から、LIC／低烈度紛争地域へと叩き落とした騒動の名だ。

「あれ以来、この街はぐちゃぐちゃになってる。食うには困らないけど、あたしの研究も遅れ気味。あの娘たちの教育係もほとんど逃げ出しちゃった。今じゃ、単純な男手も足りないぐらい」

ここで俺は気付くべきだったのだろう。この文脈だと『教育係』は複数いた事になる。もつとも気付いたところで、『お、複数の家庭教師とは教育熱心だな』で聞き逃していただろうが。

「だが、お前は逃げ出さなかった」

「ええ。今はゴタゴタしているけど、遠からず沈静する。あの娘たちの教育にも、ここが最適。そう判断したの」

俺はマリオンを素直に見直した。色々屈折しているように見えたが、それもいい意味で『強い母』の証と想ってしまった。

「ちなみにこの学校を使っているのも一種の緊急避難よ。あたしの研究所と隣接しているから、前から娘たちの宿代わりに使わせてもらってはいたの。でも、今はインフラが麻痺している上に、人手も足りないからね。騙し騙しやっているけど……」

「なるほど、それで俺が呼ばれたわけだ」

「理由の一つよ。履歴書の通りなら、機械工学は強いでしょ」

「ああ、やってみるさ」

とどのつまり、用務員代わりでもあるわけだ。この飛天市は徹底した省力化、機械化がされており、校舎もその例外ではない。だが、それに相応しい整備も必要なわけで、同じ工学でも、生命工学専攻なマリオンには不向きだ。その点、俺は機械工学専攻だったし、前の職業柄、『騙し騙し』は学者のマリオンよりも得意なはずだ。

「それに教員免許も持っていたわね？」

「一応、大学で取っておいた」

「そっちもお願い。今まであたしが教えてきたんだけど、やっぱり苦手。特に体育なんて、あたし自身が駄目駄目だからね」

あの娘たちには文武両道に育ってほしい——とマリオンは付け加えた。

「わかった」と俺は頷く。

後から考えると、実に愚かな事だが、この時、俺はマリオンに心底協力する気になっていた。少なくとも、やりがいのある仕事だと思ってしまったのだ。

そして、気が付くと下駄箱の前まで来ていた。

「それじゃあ、はい、これ教室までの鍵と地図」

マリオンは歪な笑みを浮かべて、携帯端末で送信してきた。

「ああ。受信完了だ」

「あたしは事務手続きがあるから、職員室の方へ行く。あなたは教室で娘たちと顔合わせでもしていて……あ、途中に洗面所があるから髭はそこで必ず剃る事」
「……了解」

洗面所で髭をすべて剃り落とし、身嗜みを再度整える。何年かぶりに髭がなくなって頬がヒリヒリする。しかし、それ以上に鏡を見て思った……。

——…俺は髭がないと、本当に子供みたいな顔だな。

マリオンは容姿こそ幼かったが、威厳は三十二歳に相応しかった。だが、俺にはない。これでは「娘たち」に侮られるかもしれない。自分の不安を殺すためにも、俺は頬を引き締めた。

——何事も第一印象が肝心だ。

嫌われてもいいから、恐れられる存在になろう。

そんな決意と共に、俺はガラッと教室の扉を開ける。

中にいた美少女達が揃って立ち上がり、俺に一斉敬礼をした。

俺は思わずガラッと教室の扉を閉めた。

とりあえず、深呼吸をした。そして頭を充分に冷やした。

俺はガラッと教室の扉を開ける。

中の美少女達はまだ敬礼を崩していなかった。

俺は思わずガラッと教室の扉を閉めた。

反射的に数えていた行列を思い出す。マトリクス**確か六行六列だった。つまり三十六人いたのだ。**

俺はガラッと教室の扉を開ける。

相変わらず、美少女達は敬礼を崩していなかった。

俺は思わずガラッと教室の扉を閉めた。

あの三十六人の容姿を思い出す。金髪碧眼の美少女達だった。それも一人残らず。

「……………」

勿論、俺は事態の元凶へ怒鳴り込む事にした。

マリオンは宣告通り職員室で端末に向かっていやがった。

「どういうことだっ!？」

「言ったでしょ。娘たちの教育をお願い」

「三十六人もいたぞ!」

「だから、【娘たち】って、ずっと複数形で言っているでしょう」

「全員同じ顔だったぞ!」

「同じ顔?」そこで初めて、マリオンはこちらに目を向ける。「非科学的ね。そんなわけないわ。一卵性双生児でも、環境で顔は変わるでしょ。あの娘たちも一人一人個性のある人間なのよ」

「だ、だが……そっくりだった」

「姉妹だからね。似ているのも当然だし、慣れない内は胸元の名札で区別して」

「そうだ。姉妹と言ったな。それがおかしい。黒髪黒目のお前から生まれたのに、全員がそろって金髪碧眼なんて異常だろ! 大体、三十六人もその歳で産むのは不可能だ!」

「失礼ね。確かにお腹を痛めて産んだ訳ではないけど、全員紛れもなく、あたしの娘よ。戸籍を確認してもらってもいい。それにあたしは確かに卵子を提供したわ」

「お、お前それって……」

「まあ、遺伝子を入れ替えたから、その辺の繋がりはないけど、大切なのは心でしょ」マリオンは薄い胸元を抑えて語った。

元々、俺には女性不信の毛がある。最近は大分マシになってきたが、この『女』を前にしてぶり返しそうになった。

「この事は……」

「契約書、守秘義務」

「違約金なんぞ……！」

「あの娘たちの未来は？」

マリオンに指摘され、俺は口ごもった。『マリオンの娘たち』は一目見て美しかった。皆、健康である証だ。少なくとも物質的には不足なさそうだった。

勿論、精神的にどうかはわからない。だが、外部に公表すれば、幸せになるのか？

ただでさえ、この飛天市の立場は怪しい。マスコミもネットも批判的だ。おまけに三十

六人の美少女など、無責任な世論の絶好の餌食である。公表は彼女達にとって……

「……と、俺が考えるところでいるのか？」

「うん。だって、公表しなければ、あの娘たちの未来をあなたが左右できる。愛を教えたければ、愛を教えられるし、情を教えたければ、情を教えられる。その気になれば、外界から自分たちを守る術だってさ」

公表はその後でもいいはず——はめられていると思いつつ、とりあえず、俺は興奮を納める。

「ヤヒヤー」

マリオンはそこで初めて俺の目を真っ直ぐに見た。

「Mの6次正方形——私の【娘たち】^{ドレクセス}をお願い」

勿論最初は意味が分からなかった。

それは『M 1 1とM 2 1とM 3 1とM 4 1とM 5 1とM 6 1とM 1 2とM 2 2とM 3 2とM 4 2とM 5 2とM 6 2とM 1 3とM 2 3とM 3 3とM 4 3とM 5 3とM 6 3とM 1 4とM 2 4とM 3 4とM 4 4とM 5 4とM 6 4とM 1 5とM 2 5とM 3 5とM 4 5とM 5 5とM 6 5とM 1 6とM 2 6とM 3 6とM 4 6とM 5 6とM 6 6をお願い』を略した表現だった。

おまけにこのM 1 1とM 6 6はすべて、あの金髪碧眼な美少女達の固有名詞だったのだ。

二時間目

勿論、俺は納得しなかった。当然、矢継ぎ早に質問を重ねる。

あの三十六人をお前が一人で作ったのか？ いや、そんな事は不可能だ。背後関係は？ 産みの親はどこに？ 育ての親だって他にいるだろう？ 遺伝子提供者は？ それ以前に遺伝子損耗は大丈夫なのか？ 戸籍と言ったが、国籍はどうなる？ それに人権は……。

対するマリオンは大きく溜め息をついたと思うと、端末から通信を入れる。

「ああ、M11、^{エムイレブン}どうも長くなりそうだから、お茶を持ってきて」

彼女のうんざりした物言いに、俺は少し性急すぎたかと悔やんだ。

しかし、聞かねばならない事でもある。それがわかっているのか、マリオンもゆっくり説明を始める。

「……そうね、あの娘たちが《アーデルハイトIIプロジェクト》の産物というところから話そうかしら？」

「……【高貴なる形質】か……」俺はそのドイツ語に苦笑した。「あの金髪碧眼といい、お前らは今時ナチスの真似ごとでもしようというのか？」

「ナチスは良くも悪くも社会主義政党よ。『Nationalsozialistische Deutsche Arbeiterpartei / 国家社会主義ドイツ労働者党』の正式名称の通りに。だけど、あたしが所属していた《荒夏》は極端な自由主義者の集まりだったんだから」

「……そういや、お前はシカゴ大学卒業だったな」

秘密結社《荒夏》——彼らは自由主義の権化であり、産業の高度化と経済の国際化が齎す社会問題を『民族主義から成り立つ国民国家から、自分達を切り離す』事で解決しようとした組織である。個人と意志を重んじ、^{パナキズム}選択包摂主義を理想とし、社会契約の再構築を主張した集団だ。

(だから、その中枢にはいわゆる『シカゴ学派』も多かったらしい。シカゴ大学生だったマリオンが《荒夏》に所属する事になったのも、その縁かもしれない)

そして、《荒夏》は自分たちの楽園を作ることに夢中だった。逆に言えば、他の社会を変えようとはしなかった。むしろ、自由主義・個人主義者らしく「馬鹿と関わりたくない。足を引っ張られたくない。私たちが放っておいてくれ」というのが、本音だった。他者に干渉しまくったかつてのナチスとは真逆だろう。

——もつとも、それが悪かったのだが……。

ナチスとは逆に、《荒夏》は民族差別に反対した。故に民族主義が持つ弱者救済も切り捨てた。結果、国民国家が多数を占めるこの世界では『悪の秘密結社』という事になり、既存政府から袋叩きにあった。

そして、《荒夏》は敗北。

この飛天市は、もし『独立』に成功していれば、新たな首都になっていたかもしれない。城壁都市だ。しかし、今では敗者たちの夢の跡であり、^{Low Intensity Conflict}低烈度紛争地域である。

——ただし、宝の山でもある。

彼らは変革を望むにあたり、勝算を練らなかつた訳ではない。《荒夏》設立の背景には

あの女媧泥ユニットがある。結晶細胞がある。異形細胞がある。そこから発達した高度な生命工学がある。これらは現行技術から考えれば、既に先端というよりも異端というべき領域に達しているという。

——その《アーデルハイトIIプロジェクト》とやらもその一つなのか？
それだけでなく、遺伝学はナチス時代とは格段に進歩している。

このマリオンが馬鹿げた優生思想に囚われる事もあるまい。ならば……

「おおよそ推察していると思うけど」とマリオンは微笑んだ。「リー・M・シルヴァーの『複製されるヒト』を読んだ事ある？ あるよね？ ヤヒヤーってば、夢見る男の子で、昔からSF好きだし」

「《ジン・リッチ》……か」

俺は初見で思い付いた言葉をととう口にした。

やはり、あの娘達は【設計された赤ん坊】の一種なのだ。

操作改変あるいは複製量産した遺伝子で受精卵を作り出し、特定の先天性質を持ったヒトを産み出そうとする技術……

——その成果こそがあの【娘たち】ということか……

「前世紀に書かれた『複製されるヒト』が《荒夏》とは無関係だったように、あの娘達は《女媧泥ユニット》由来の一連技術とはあまり関係がない。そうね、せいぜい、ベクターウイルスの代わりに結晶細胞に使って、フォンIIノイマン型コンピュータの代わりに演算結晶を使ったぐらい」

「例の異形細胞は関係ないんだな？」

「当時は実用段階ではなかったしね」そこでマリオンは口を尖らせ、「勘違いされているみたいだけど、あたしは保守的な女よ。だから、最初は『枯れた技術の水平思考』一本で行こうと思っていたんだから」

マリオンの言い回しはともかく、革新性よりも信頼性を重んじる姿勢はよくわかった。問題が出尽くして安定した既存技術で進めたがったが、それでは性能不足な部分が出て、やむを得ず胡散臭い最新技術を一部投入した。——といったところか？

そういった職業的な保守性は俺にもある。人命がかかっているという共通点から、同じ結論に達したのかもしれない。しかし、それならそもそも、何故こんな事に出した？俺の表情を読んだのか、マリオンは説明を続けた。

「産業形態の高度化にも関わらず低迷する学力水準、その高度産業の恩恵だけを受け、低下する身体能力、さらに晩婚化や環境破壊による遺伝子損耗——そして、先進諸国において深刻化する少子高齢化。この社会は質的にも量的にも人材開発が行き詰っている。抜本的

解決策が必要になった。——そう考えた人たちがいてね」

「だがそれは……」

「あなたの主観や、社会の実態はどうでもいいの。肝心なのは、そう考えた人がいた事と、その人達がそれを実現するだけの力を持っていたという事。リ・シルバーの言い回しを借りるなら、自由意志の下に」

「……」

「彼女たちが例外なく女性なのも、その人——とりあえず、《立案者》^{プロジェクト}と呼ばれるか？——その《立案者》の意思が絡んでいる。繁殖や性ホルモンなどの生物学的問題だけじゃない。将来的に地球人口における女性率が低くなると予測される社会学的事情とか……、それとひよっとしたら《立案者》の個人的嗜好も大きいのかも」

「金髪碧眼もか？」

「それはあたしの趣味かな？ プロジェクトはその方向性でいくつにも分かれていて——《荒夏》は多様性とボトムアップを好んでいたからね——あたしが担当した《マリオン》プランでは金髪碧眼を標準にしたっていうだけだから」

「他のプランの【高貴なる形質】は違うと？」

「うん。黒髪黒目も多いと思う」とマリオン。「ただ、あたしの《マリオン》プランはプロジェクトの中でも有力で、特に『標準型』^{スタンダード}として優秀だったわ。それがあたしの研究主題だったしね。目指せ業界標準！って事。だから、この『マリオン』を基本とした派生型【高貴なる形質】は金髪碧眼が多いと思う。それでなくとも、何だかんだで金髪碧眼は人気だし」

「……高尚な事を言うわりに低俗だな」

「技術的にも適切な目標だったんだってば。『天然には希少だけど、生理が安定していて、需要もある形質を量産する』っていうのは」

「それはわからんでもない」

たしかに金髪も碧眼も著しく生存に不利なわけではない。紫外線に弱い程度だ。人類史通りなら、むしろ性淘汰に有利だろう。それこそ、赤い目——大概是視覚障害を伴う形質——などよりはマシだ。

「プロジェクトの中でも極端な例だと、スーパーモデル級の痩身に、グラビアアイドル級の巨乳、オリンピック級の身体能力、さらに一種の天才症候群への適性まで具えた美形の【高貴なる形質】を作ろうっていうプランもあったらしいけど……」

「……素人目にも無理がないか？」

「まあねえ。あたしには縁遠いけど、巨乳って動く時に邪魔だしねえ。それと身体能力の

両立は難しいよねえ」

マリオンはそう言って、皆無に近い乳房の上で、架空の巨乳を揉む仕草をする。

俺は思わず視線を逸らし、論理のみを説く。

「それもそうだが、天才症候群への適性のところだ。それはヒトの知性をコードしている部分に手を出すという事だろう？」

俺はこの手の遺伝子操作は三段階に分けて考えている。

第一段階は極端に有害な部分の排除修正——要は重大な遺伝病などの治療。

第二段階はハードウェア部分の改変、身体能力の強化。

第三段階はソフトウェア部分の改変、知的能力の強化。

このうち、現在公認されているのは第一段階までだ。政治的にだけでなく、経済的にも、この辺りが精一杯なのだろう。

ただし、技術的にはその限りではない。遺伝子ドーピングなどはアテネオリンピックの頃から問題になっている。器官の増設や削除を除けば、第二段階ジーンリッチが既に誕生している疑いは、しばしば囁かれていた。

実際、あの【^{ドクターズ}娘たち】もこの第二段階に分類できるだろう。

しかし、第三段階ジーンリッチについては正気の沙汰ではない。

そもそも、遺伝子操作とはおっかなびつくり進めていくしかないものだ。

何しろ、遺伝子とその発現は単純な対応関係にあるわけではない。

例えば、ヒトのゲノムDNAは六十億塩基対——わずか6ギガだ。DVDなら二層式で一枚に収まる。しかも、遺伝子の数は何と三万二千程に過ぎない。

人間はそんなに単純か？ ……さすがにそんな訳がない。

そこには創発現象があり、自己組織化がある。また、当然環境要因も絡んでいる。第一6ギガというのも細胞核のゲノムサイズに過ぎない。実際には共生細菌もDNAを持っていく（それで、俺が消化できない海苔^{のり}を、日本人は消化できるのだ）。

これは複雑系の極みといってもいい。だから、おっかなびつくりになる。

ある遺伝子をノックアウトすると、黒髪のマウスが白髪になったとする。ならば、その遺伝子が髪を黒くするのか？ 答えは否だ。『その遺伝子が髪を黒くするのに、関係している可能性がある』に過ぎない。髪が黒くなったのは、全く別の要因かもしれない。仮にその遺伝子が髪を黒くするのに関係していても、それは複雑な相互作用の一因に過ぎない。実際、ヒトの髪の色が単一遺伝子で決定されない事は既に定説だ。

「よく考えると、ちゃんと全員を狙い通り金髪にできただけでも大したものだ」

「そ、そう？ ……あ、ありがとう」

マリオンは頬を染めた。鈍い俺はそれが二十年ぶりに見た光景だとは気付かなかつた。「だが、知性となると話が変わってくるだろう？」

知性——頭の良さは定義するだけでも難しい。ある人物の髪の色や足の速さは皆が同じ意見を持ち得る。が、ある人物の知性となると意見が真つ二つに割れる事も珍しくない。『本当の頭の良さ』という空虚な言葉が流行るのも無理なからぬ事だ。

一応、知能指数や学歴偏差値という目安はあるが、それを測れるのは人間を育て上げてからだ。身体能力では可能だった動物実験も不可能になる。さらにヒトのソフトウェアはハードウェア以上に複雑怪奇で環境要因が大きい。どんな人種でも中国で育てれば、中国語を話すように。この条件で遺伝子と知性の対応関係を見抜けというのは困難極まる。

そして、実際見抜けていない。ある遺伝子配列で『色素が薄くなる。金髪が発生するかもしれない』『筋肉が付き易い。足が早くなりそうだ……なるといいなあ』とはわかってきても——故にあの【娘たち】もここまで成功できたのだろうか——『一流の大学に入り易くなる』とかはさっぱりなのだ。

仮に、記憶力や計算力と単一の対応関係になる遺伝子があったとしても（多分、そんなものは存在しないだろうが）、それを下手に組み込めば、精神障害に繋がるだろう。

それこそ天才症候群が天才症候群とあたかも病気のように扱われる所以だ。ゆえんところが、マリオンはそこで口を挟む。

「あー、それね。どちらかというと、その第一段階の結果として、天才症候群への適性が生まれる——ってという話だったんだ」

「はあ？」

「ほら、主に農耕文明の開始と共に人間の生存競争は穏やかになったよね。だから、危機回避能力に欠陥があっても淘汰されないようになって、結果、我々は遺伝子段階での知的劣化に陥っている——って説があったでしょ？ 逆に言えば、遺伝病の治療と同じように、その劣化部分を修正するだけで、ある種の天才症候群への適性が獲得できるかも？——という話だったの」

「前提となっている知的劣化説が胡散臭いだろ」

「まー、それこそ性淘汰とかの選択圧を軽んじているわね」

それだけではない——と、俺は拳を握る。

「例えば、チンパンジーは瞬間的な判断力ではヒトを上回る。だが、持続的な集中力ではヒトに劣る。これは表裏一体で不可分な可能性も高い。危険な肉食獣を素早く回避できるようになる代償に、机に座って教師の話聞く事が出来なくなつたとして、それを知性の向上と言えるのか？」

「……なんか妙にのめり込むね？」

マリオンはきよとんとこちらを見つめていた。

俺は一瞬『AAS』と口走りそうになる。しかし、実際には

「……おまえの言う通り、俺はSFとか好きなんだよ」

とだけ答えていた。マリオンは胡乱な視線で「ふーん」と相槌を打った。

そして――。

「ちなみに、あたしの【娘たち】における調整は概ね第二段階までよ」

「概ね、だと？」

「遺伝子进行操作はしていなくても選択はしているからね。結果的に第三段階と同じになる部分もあるかもしれない」

「……」

俺は着床前遺伝子診断でも似たような話があるのを思い出した。

「この際、ヤヒヤーを安心させてあげるわ。さつき話した無茶なプランは机上計画だけで終わったヤツがほとんどよ。実行に移されたとしても、あたしは関知していない」

……いずれにせよ、あの三十六人以外にも【高貴なる形質^{アーデルハイト}】はまだいるという事か？

俺は頭を抱えた。

しかし、マリオンは蠱惑的に問いかけてくる。

「でもさ、ヤヒヤーだって、好きでしょ？」

「……」

抱えた頭が冷え渡った。

一連の会話を好まなかったと言えば、嘘になるからだ。俺も子供の頃は学者に憧れた。

だから、本物の学者になったマリオンを――人格面はともかく――尊敬している。そんなマリオンが落伍者である俺に質疑応答してくれるのだ。それも一対一で。

喜んでいないと言えば嘘になる。愉しんでいないと言えば嘘になる。

口でマリオンの倫理を非難しながらも、心はマリオンの研究に興奮しているのだ。

「俺は……」

「ほら、やっぱり金髪巨乳が好きなんだ」

……とりあえず、こいつは男に幻想を持ち過ぎだな。

三時間目

金髪碧眼の美少女――おそらくはM11――が急須と湯呑茶碗を盆に載せてやってきた。

彼女は無言で緑茶を入れる。

ただ、それだけの動作を見ていられず、俺は思わず目を逸らした。

これは【娘たち】すべてに言える事だが、何故か彼女達は共通して、首から下を潜水用ウェットスーツのようなもので覆っていた。その生地はやけに薄く、肌に張り付いている。しかも、潜水服にはあるはずの付属機材がない。視界を遮るものがない。

つまり、裸形の線が丸出しになっているのだ。

しかも、このM11は十六歳の少女だ。発育もいい。細身な手足とは逆に、胸や尻は瑞々しくも豊かな膨らみを成している。

いや、繰り返すが、それがある意味丸見えなのだ。

おまけに当人は真剣な顔でお茶を入れるだけで隠そうともしない。

前の相棒の呉羽くれはも女だったが、肉感的とは言い難い方だった。それだけにこの娘たちの色気には……どう相対すればいいのか、わからなくなる。

芳香が漂う。

二つの湯呑へ交互に入れられた緑茶が無言で差し出された。

そして、M11は『不動の姿勢』を取る。俺は視線を向けないように湯呑を取る。

一方のマリオンは愉快そうに立ち上がる。

「凄いでしょ。これ」

と背後から少女の大きくも形の良い乳房を掴んだ。

「十六歳にして、Eカップ」

少女は一瞬間をしかめたものの、マリオンが揉むのを拒もうとはしない。

「もう、成熟期に入っているけれど、二年後までには70のFになる予定よ」

直立不動の少女がなされるがまま……ただ表情は陶然としたものに変わる。

「ふえっ」

と、少女は喘ぎ声をあげた。【娘たち】が初めて見せた人間らしい顔がよりにもよってこれだった。だが、マリオンの手は止まらない。少女の股間にその手が……

「やめんか……！」

俺は湯呑を乱暴に置き、大声で怒鳴りつけた。

マリオンはニヤニヤと笑う。逆にM11——エムイレブンは俺を睨んでいる気がした。

「で。どう、感想は？」

胸を揉むのはやめずにマリオンは聞いてきた。

「感想って……！」

「苦労したのよ。さっきも言ったけれど、機能美と芸術美の両立は難しいんだから」

マリオンはあっさりと言ったが、俺にはそれが照れ隠しだとわかった。

このエムイレブンをはじめとする【娘たち】の凄さは、金髪碧眼の美貌だけではない。筋肉の筋はうっすらと見えるだけだが、その強靭さははっきり伝わってくる。それでいながら、乳房の脂肪ははち切れんばかりに自己主張している。前二者はともかく、後二者はそれぞれ矛盾するのだ。それらの兼備には『機能美と芸術美の両立』の一言では表しきれない努力があったに違いない。

だから、俺は忌憚なく言った。

「こんな破廉恥な格好をさせてなければ、俺は素直に激賞出来たよ」

「あら、ちゃんと肌は隠れているでしょ？」

たしかに露出という意味では皆無だが、これでは全裸同然である。

俺の内心を察したのか、マリオンは勝手に説明を始める。

「あー、これ？ これはね、《タマゴロモ》よ」

「はあ？」

「『Tension Analyzer/Action Analyzer/Growth Observer/Reciprocal Organic Memory Battery』の頭文字をとって、『緊張分析・運動分析・成長観察・相互有機メモリオブジェクト』の頭文字をとって、《TAMAGOROMO》」

「……何だかおかしくないか、その略語？」

「しよがないでしょ。日本人の考えた略語だからさ。それともヤヒヤー、五言絶句作ってみる？ あ、この場合、五言は中国語で五文字五音節を意味し、絶句は……」

「わかった。悪かった」

俺は素直に謝って、マリオンに続きを促した。

「元々、このタマゴロモは異形使役者が甲冑を展開した時、先読み式主従追随システムを補助するために作られたの。筋電位等を測定して、外部に安定増幅させて放出する。その信号を受け取った異形細胞はより確実な動作を行うって訳」

「緩みや弛みなく肌に密着し、厚みがないのはそのためでもあるのか？」

「そ。だから、この娘たちはノーブラノーパンよ」

マリオンはパチリと片目を瞑ってきやがった。

「……で、なんでそんなものを着せてやがるんだ？」

「え、だって、便利なんだよ。これ。元々、軽いし動きやすいし。防護性も高く、体温調整機能も抜群。ブラはつけられないけど、これ自体が補正下着になるし、汗とかの……」

マリオンの口ぶりが乱れてきた。俺は勘ぐらざるをえない。

「それだけか？」

「…：健康管理だったのよ」

「おい、やっぱり不安があるのか？」

俺は嫌な予感を膨らませた。

マリオンによると【娘たち】は染色体を弄繰り回されたらしい。それは染色体を傷付けられたとも言える。ならば、どこに障害が出てもおかしくない。

「《マリオンIIプラン》のみならず、《アーデルハルトIIプロジェクト》そのものが女子を前提としているのは…：本当のところ、雄では危険だからではないだろうか？」

「…：根拠は？」

「ヒトの場合、元々、男子の方が死亡率は高い。そのせいかな自然出産では男子の方が出生確率は高く、医療福祉の充実した先進国では人口における男性率が逆に高くなる。ああ、これはお前も言っていたか？ いずれにせよ、卵子に挿入する遺伝子を調整する過程で、何らかの問題が発生しても、女子の方がそれに耐えて生き延び易い事が期待できる」

「…：」

「それに、ヒトが哺乳類である以上、その胚は基本的にすべて雌だ。これを雄にするには発育段階で適切なホルモン投下等が必要になる。だが、この過程で失敗する恐れもある。何もしなければ雌になり、それで需要があるのなら、不必要なリスク過程を排除すべき。

…：違うか？」

「…：五十歳の女性が出産するよりは安全よ。理論的にも結果的にもね」

そんな超高齢出産と一緒にするなよと思ったが、しかし、それが彼女達の政治的な弁明なのだろう。危険性を理由にこのアーデルハルトIIプロジェクトを禁止しようとするれば、高齢出産も禁止しなくてはいけなくなる。

「とはいえ、不安だったのは事実よ。動物実験とコンピューターシミュレーションを何度も繰り返しても、満足できなかった。それこそ…：そうね、ヤヒヤー好みに喩えれば、これ、アポロ計画並みの『飛躍』だったから」

「アポロ計画か…：なるほど、確かに『飛躍』だな」

アポロ計画は言うまでもなく人類初の有人月面着陸を成功させた偉業である。しかし、内実は綱渡りであり、批判も多かった。何しろ、低軌道上までの宇宙船投入技術も確立していない時期に月面との往復を目指したのだ。息継ぎもできない子供が泳いでナイル川を渡ろうとするに等しい。

そもそもが技術の発展結果というよりも、当時のアメリカの政治上の都合——ソ連との競争の一環——から、出発した計画である。

堅実な『一步』^{ステップ}とは言い難い。それこそ、博打に近い『飛躍』^{リープ}であった。

（ある意味、今でも宇宙開発はその後遺症を背負っている。何しろ、工学的に考えれば、必須の足場固めたる低軌道開発を疎かにし、いきなり月旅行という果実をもぎ取ったのだ。当然、後が続かない。三十八万キロ先の月に辿り着いたのはその一時期だけ。今の人類はわずか高度三千キロ以下で足踏みを続けている）

マリオンプランにも似たような無謀さはあったらしい。

『『飛躍』に挑戦する以上、どんなに事前の準備を重ねても、未知の問題に出くわすのが、むしろ普通——アポロ計画関係者も本当は覚悟していたと思う』

だから、マリオンも覚悟していたのだという。

「最初はそれこそ、全員を健康体にできれば、それで十分だと思っていた。金髪だって、第二次性徴までは確定とは言い難かった。オーストラロイドのように、幼少期は金髪でも成長に従って黒髪になる例は多いからね」

「……」

「けど、アポロ計画も結局は成功だったでしょ。十三号の事故ですら、死傷者を出すことなく、帰還している。とりわけ最初の月面歩行なんて、宇宙飛行士は……」

「……『予測は外れ、着陸後は月の重力を大変快適に感じました。実際には、無重力状態と地球の重力のいずれよりも、月の重力の方を好ましく感じていました』……か？」

俺がアームストロング船長の述懐を諳んじると、マリオンは「さっすが」と口にする。

この【予測は外れ】とは『月の重力が快適ではないという【予測は外れ】』たという事だ。勿論、その時の宇宙服は1/6Gである月面作業を考慮されていた。加えて、月面歩行のための訓練も重ねていた。しかし、それでもなお予測外の問題が頻出するだろうと予測されていたのだ。

何故か？——決まっている。『飛躍』に挑戦する以上、どんなに事前の準備を重ねても、未知の問題に出くわすのが、むしろ普通だからだ。正真正銘前人未到の第一歩だったのだ。どれだけ予め考え尽くしても、だからこそ、考えてもいかなかった困難に出会うと覚悟していたのだ。

実際、アポロ計画も他の場面では、予測外の連続に四苦八苦している。

しかし、あの月面における『小さな一歩』については、予測外に予測通りだったのだ。

そして……

「おまえのプランも同じように望外の完成度に至ったという訳か？」

「その通り」

マリオンは興奮していた。傲慢に見える彼女にも不安と、それが解消された歓喜があったらしい。

「あたしは【娘たち】の顔立ちや体付きまで制御できた。懸念していた各種障害も現在のところ見つかっていないわ。それどころか、この娘たちの潜在能力は多少なりとはいえ、心身両面で常人を上回っている。怖いくらい計画通りよ。勿論、これが遺伝子操作の結果なのか、あるいは教育環境の結果なのかはわからない。でもね、あたしのプランがアポロ計画に匹敵する『偉大な飛躍』に成功した事実は揺るがない……！」

「う……ううむ」

確かに凄い。これは自画自賛と笑えない。俺は本気で唸っていた。口には出さないが、改めてマリオンを尊敬した。こんな才女と幼馴染だったという事だけでも、誇りに思えてきた。

……だから、そんなにうまくいっているなら、何故、俺が呼ばれたのかという事には、頭が回らなかったのだ。

しかし、常識人として、一応、彼女たちの心身の安全に気を遣う。

「では、当初危惧していたような障害は出なかったんだな？」

「ええ。元々、タマゴロモはその機能を生体記録採取に流用して、万が一の事態に備える目的に使っていたの」

「今は違うと？」

「生体記録採取は続けているけど、医学上の必要というよりも政治的な配慮によるものね。あとで揉めた時に『この娘たちはこんなに健康なんですよー』って、説明するため」

なるほどなるほど。そういう事なら……

「……いや待て、そういう事なら、タマゴロモ一丁でいさせる必要はないんじゃないか？ あの上にもっとまともな服を着せてやっても……」

「そんな事より、ヤヒヤー、雇用主として大切な質問があるの」

聞けよ。おい。心底、言ってやりたがったが、俺も雇用関係を出されると弱い。

「あなたは誰が好きだった？」

「……お前は何を言っているんだ？」

「あの娘たちの中では、誰が一番好みだったかと聞いているの」

「……質問が唐突過ぎるだろ？」

「あたしは努力したの」マリオンはさらに唐突な事を言いやがった。「繰り返し言になるけど、この娘たちを素敵なカラダにするため、設計段階からずっと熟慮を重ねてきた。演算結果といっても人体のような複雑系を予測するには性能不足だし、第一世代が誕生した十六年前は尚の事だったからね。その甲斐あって、とりあえず設計通りに育ってくれた。けど、そうなる今度は設計自体が正しかったのかと不安になってきてね」

つまり、女性であるマリオンの欲望を詰め込んだ設計になっていて、ちゃんと男好きがするカラダになっているのか不安なのだという。

「あー、皆美人過ぎて、甲乙つけがたい。それ以前にちよつとしか見てないからわからん。これどうだ？」

マリオンはあからさまにがっかりした顔になった。畜生知った事か。

「ま、『いや、まだ子供だろ？』が出て来なかったからよしとするか……」

「……勿論、それも考えているぞ。最年長でもええと……」

「十六」

「十六歳だろ？ 現代先進国の基準ではいささか若過ぎる」

「何言っているのよ。この年頃が一番『種付け』に向いている時期なの」

マリオンも昔は内気な少女だった。それが今では平気でこういう事を言う。時の流れは残酷である。

しかも言われた側のエムイレブンが無言無表情を貫いているのがやるせない。

「卵子活性とかさ。やっぱりこれぐらいが最適。あとは歳をとる毎に駄目になっていく」

その台詞で俺は勘繰った。第一世代が産まれた頃、それこそマリオンは十六歳だ。当時下っ端だったはずの彼女がこのプランを担当できたのは……。

「そ。良質の卵子を大量に提供できたから」

えげつない話だ。

「でも、この歳になると、やっぱ活性が落ちちゃってさー。もつと若いうちに色々やっておくべきだったと思うのよ」

「それはわからんでもない。いや、生殖能力に限った話でもないが」

というか何で俺は女と二人でこんな話をせねばならんのか？

しかし、マリオンは我が意を得たりと言わんばかりだった。

「でしょ。なのに、あたしの意見は生物学的見地に偏りすぎだって言われるの。たしかに現状十代の出産は経済学的には危険ね。でも、それは経済が間違っているだけよ。そこに人間を合わせるのは本末転倒。人間に経済を合わせるべきだわ」

どうもマリオンは専門家だけあって、高齢出産への危機感は強いらしい。とはいえ……、

「とはいえ、精神的な未熟さをおもんばか慮るべきという意見はもつともだと思うぞ」

俺は自分自身を省みて、一言付け加えざるを得なかった。

すると、白衣の幼馴染はケラケラと笑う。

「ヤヒヤー、あなた今三十二歳だけ……まさか自分が成熟しているつもり？」

俺は口籠った。前の相棒だった呉羽は年少者だった。だから、その呉羽の前では大人を

演じていた。その時間が随分長かったものだから、板に付いてきたものだと思っていた。しかし、少しばかり一人で過ぐすと、地が出てしまうらしい。

「いずれにせよ、あの娘達にもそろそろ男との付き合いも学んで欲しいの。だから、ヤヒヤー、その辺りもお願いね」

マリオンは娘の胸を揉んだまま、まるで決まった事のように言ってきた。

四時間目

「【御主人様】、ご命令はまだでしようか？」

金髪碧眼少女は美しくも聞きとり易い明晰な発音だった。

しかし、俺は返答するまでに数秒を要する。

「……いや……まず、その呼び方をやめろ」

「しかし、あなたは修士課程を卒業していると、ドクターマリオン博士が仰っていました」
「……」

俺は舌打ちしなくなった。俺は修士マスター、マリオンは博士ドクター、どちらが上かは明白だ。しかも、俺はこの国では誰も知らないような二流大学、マリオンはこの国でも知られた名門シカゴ大学。……要するに学歴劣等感をつつかれたのだ。

——今さら、本物の学者に張り合っても仕方ないだろうに……。

案の定、マリオンが後ろでニヤニヤ見守っている。

俺はやるだけやってみようとM11を連れて教室に戻った。

初回という事で、マリオンも付いてきた。

そして、教壇に立ったまではよかった。

だが、いざ三十六人の美少女を前にして、つい黙り込んでしまったのである。

こういう経験は二度目だった。

大学でも、教育実習で初めて教壇に立った時、ガチガチになって口が回らなくなった。これは実際に授業などを受け持ち、見知らぬ生徒に整列された経験のある者なら、少しはわかってくれるはずだ。近代教育における生徒の整列は、軍隊の整列に由来するが、これには威厳や風格といった心理的な効能も大きい。そして、それに伴う圧迫感は教壇に立つ教師の方にも容赦なく襲い掛かってくる。

だから、そういった空気に慣れない内は、緊張で思うように振る舞えないものだ。逆に言えば、慣れてしまえば、大したことはない。

そしてさすがにもう慣れた……と思っていたが、それは普通の生徒が相手の話だった。美少女三十六人による無言の視線に耐えられず、俺は脂汗がだくだく流れてしまう。

本来は個性豊かな人間が、似たような年齢能力で集められ、同じ服装をさせられ、同じ行動を強いられる。画一による合理性、これは近代学校教育の基本だ。

——そういった意味で『マリオンプラン』は近代学校教育の正統後継なのだろうが……。
しかし、度が過ぎている。顔も体も遺伝子も画一など、前代未聞だ。

だから、普通の生徒の相手には慣れていても、度が過ぎた美少女三十六人を前にすると、
圧倒されてしまう。

——技術的には大いに賞賛したい。『美』という概念自体が、画一を伴うということもよくわかる。が、こうして見るとな……。

そうぐるぐる考え込んでいると、M11?……らしき年長娘が俺に言ってきたのだ。

「では、マスター、ご命令を」

——と。早く指示を出せ——と再び要求してきたのだ。

そこでふと気づく。マリオンも後ろで「へえ」と面白そうな顔をしている。

……こいつ、もしかして、苛立っているのか？

考えてみれば、マリオンの淫行を辞めさせた時、先程のM11とやらは、不躰な視線を向けてきた（と、思う）。実に理不尽なもの、こいつがM11?なら、俺に不満を抱いているのかもしれない。【マスター修士】呼称も、深読みすれば、皮肉と言えなくもない。

勿論、只の気のせいという事もあり得る。

しかし、そうでなかったとしたら……

——ふん、面白いじゃないか。

俺は一気に緊張が解け、自然と腹式で声が出る。

「よし。全員、体育館に移動だ！」

まずは走らせてみることにした。俺に言わせれば、すべての基本である。

「マリオン、あの破廉恥な格好は体操着としても使えるんだな？」

「勿論。例えば、巨乳に対しても第二世代タマゴロモはスポーツブラとして……」

「なら、問題ない」俺は『鬼軍曹』風に、説明を一蹴した。「小娘ども、さっそく命令だ。まず、走れ！ 全員でこの体育館を縦に十往復だ！」

すると美少女達は一斉に従った。

さすがに年齢ごとに足並みが異なるものの、皆、かなりの速さで体育館を走っている。

——内心はわからんが、とりあえず、俺の言葉には従うか……。最初の敬礼を考えれば、当然だが……。

俺はその間に携帯端末で体育館を測距する。目測では五十メートルに見えるが……。

「五十メートルよ」

マリオンの指摘にやや遅れて、携帯端末もほぼ同じ返答をする。

「ていうか、何メートルかもわからないで、走らせたわけ？」

「俺のやり方が気に入らないなら。解雇しろ」

「……ごめん」マリオンはあっさり謝った。「あたしはいつも理詰めであの娘たちを育ててきた。だから、こういうやり方は慣れていなくて」

マリオンの言いたい事はわかった。少女達の走り方から見て、運動をさせてこなかったわけではないはずだ。むしろ、かなり鍛えられている方だと思う。ただ、マリオンなら、走らせる前に熟慮を重ねるのだろう。彼女の娘達への姿勢は工業製品のそれに近い。が、高級品に対する態度でもある。つまり、愛情を持って、丁寧に扱っている。品質向上のため、運動をさせるにしても、過剰な負担にならぬように距離ぐらいは予め考えておくのだ。ただ……、

「俺も理詰めだよ。この場合、距離が大して重要でないだけさ」

そんな話をしていると、美少女たちが次々と走り終える。年少組ほど遅れ、息も荒い。合計1キロメートルだが、往復になるので速度に緩急もつけねばならない。

きついはずだ。

しかし、俺は再び声を張り上げる。

「よし、全員走り終わったな。では、次は二十往復だ！ とっと走れ！」

そして、この命令にも少女たちは無言で従った。

一方で、マリオンは感心したように呟いた。

「……なるほどねえ」

「何が『なるほど』だ。自分でやらせておいてなんだがな。この娘らには反抗はおろか、手抜きの気配すらないぞ」

「異常かしら？」

「……あえて言えば、先進国の子供の走り方に近い。それも中産以上の階級に育てられた真面目な類のな」

「へえ。ちよっと意外な感じね。先進国の子供なんて、甘やかされている気がするけど。」

あたし自身超甘やかされたし」

「俺の経験則でしかないから、一般論としては疑問だがな……」

極言すれば、富裕層の子には親への信頼感がある。暖衣飽食を保障されてきたからだ。親は自分を虐げない。誤った指示で苦しめたりはしない。その実績がある。だから、一見でたために思える指示でも、ちゃんと深慮がある。そう考える事が出来る。

そのため、子供は親を疑うという事を中々覚ええない。

これが貧困国だったり、貧困層だったりすると、そも親に余裕がない。だから、子供を虐げたりすることも多い。間違った指示で苦しめたりもする。『口減らし』すら、過去のものではない。衣食住を保証した実績がない。そんな相手に信頼は抱き難い。

そのため、子供は親を疑うという事を早く覚える。

双方の子供が「走れ」と言われた時、前者は愚直に走り続けるが、後者は余力を残す事を忘れない。

（もつと言えば、大人も同じだ。治安が確保され、賃金が保証されている国では、誰もが勤勉に働く。しかし、そうでない国では皆仕事の手を抜く——くたくたになるまで働くと、帰りに強盗に会うからだ）

「いずれにせよ、指導が適切で信頼が確立していれば、子供はやり遂げるものだよ。この娘たちのように、先天的な才能と後天的な訓練を兼備している場合だけではない。冷暖房完備の部屋で甘やかされて育った小学生が、いきなり荷物背負って山道を二十キロ歩けと言われても、意外と歩けるもんなんだ」

「ふうん。ていうかさ。その小学生って、ヤヒヤー本人？」

「よし、全員走り終わったな！ では、四十往復だ！」

俺は無視して、話を続ける。

「ただ、それにしたって極端だ」

往復数を倍々に増やしていくのは、勿論、心理的な圧迫を加えるためでもある。同時にこの娘たちが『あとどれだけ走らされるかわからない時、どんな走り方をするのか？』を知りたかったからでもある。

しかし、結果は異常だった。

彼女たちは一往復目と三十一往復目で走り方が変わっていないのである。いや、当然、疲労で速度が落ちている。年少組になる程、それは顕著だ。しかし、指示に対する姿勢は変わっていない。黙々と疾走を続けている。文句を口にするどころか、不満を顔に出す事すらない。

「……もうわかっていると思うがな、こうやって走らせるのは……お前好みの下品な言い

方をすれば、マインドファックの意味もあった」

「あたし好みという部分が気になるわね」

「しかし、この娘たちには必要ない。むしろ、その逆が必要になる……」

「あら、そう？」

マリオンは自慢げだった。

今、この娘たちは俺に従っているのではない。マリオンに従っているのだ。おそらく、マリオンが俺の命令に従うように娘たちに言伝してあるのだろう。俺はマリオンの代理に過ぎない。

だから、忠実さの真の対象であるマリオンが誇らしげになるのだ。

——問題は、忠実さもここまで来ると、確立された信頼というよりも、成功した洗脳に思えてくる事だ。

もつともそれを指摘したところで、マリオンは両者に大差がないと言うだろう。

「しかし、言っておくがな。この調子だとこいつら倒れるまで走るぞ」

「定量的には？」

「あと八十周でやめさせる。年長組はともかく年少組がそろそろまずい。特に今後ろから、二番目にいる奴はそれ以上やらせると倒れる」

「へえー」とマリオンは行儀悪く携帯端末を弄りながら、付け加える。「さっすがー」

「茶化しているのか？」

「いや、まじめな話よ。あたし、この娘たちの肉体的限界を判断するアプリを組んだの。過去の集計記録と現在の観測結果からね。で、今、そのアプリを確認したけど、出会って数時間のヤヒヤーと同じ事を言っている」

「ふん、慣れた仕事だからな」

「あー、やっぱりヤヒヤーってば、女の子の扱いには慣れてるんだー」

「そっちは慣れていない。だから、目の毒だ」

俺はいい機会なので正直に言った。

少女達はただ往復しているだけだが、裸に等しいタマゴロモ姿なのだ。

こちらに向かってくる時は胸が目立つ。こちらから去っていく時は尻が目立つ。

まだ慎ましい十一歳から、既に豊かな十六歳まで、一通り——しかし、等しく瑞々しく整った肢体を見せつけられては、やりにくい事この上ない。

「せめて、上にジャージぐらい着せるわけにはいかんのか？」

「それは却下だね。座学ならともかく、激しい運動をさせる以上、体調管理と記録採取はしっかりしておきたい。タマゴロモの測定誤差に繋がる要素は排除したい」

「おい、俺が信用できないと？」

俺は少し声を低くした。卑しいやり方だとは思う。が、俺が加減を間違えると疑われているのだ。いささか腹も立つ。それでも新人教育には定評がある。実際、俺はこの三十六人でも最初に脱落する者を見抜き、それはマリオンも賞賛したではないか。

しかし、マリオンははっきり言う。

「できない。ヤヒヤーは新人教育の専門家かもしれない。けど、この娘たちの専門家ではない」

「……………」

そして、こういう時のマリオンを翻意させるのは無理だった。